



鈴舞を奉納する八乙女

撮影 水野克比古写真事務所
水野秀比古



天満宮

題字・後西天皇御宸筆



遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

—北野天満宮の由来—

創建は村上天皇天曆元年(九四七)六月九日 朝廷の格別の崇敬を受けた二十二社に加列また臣下として初めて官幣中社に列格されました
当宮は 菅原道真公(菅公)の神霊をお祀りした全国の天神社・天満宮の宗祀の神社です
学道大祖・風月本主と崇められた菅公は 和魂漢才の精神で誠の心を以て文問に勤しまれたことから 学問をはじめ 芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されています
天神信仰は 千有余年の長い歴史の中で人々の心の支えとなる神として篤い崇敬をうけ 各時代の社会構造と相まって変化し 継承され「天神さま」として高揚されてきました
菅公が生涯 貫された「誠の心」は現在も生きています

講社大祭齋行 天神信仰の昂揚を祈念

「一層の信仰心を」と千会長「挨拶

天神信仰の更なる昂揚を祈念する北野天満宮講社(会長・千玄室裏千家大宗匠)の平成二十三年度講社大祭は、七月三
日午後一時半から本殿で厳かに斎行されました。

講社員約四百人が参列されるなか、神饌と全国二千五百人の講社員名簿を神前にお供えて祝詞を奏上、天神信仰の更なる昂揚と皆さま方の無病息災、家内安全、諸願成就をご祈念申し上げました。

この後、白衣に緋袴、おすべらかしの髪を花で飾った八乙女が優雅な鈴舞を奉納し、講社員を代表して千会長が玉串をささげられました。

祭典後、千会長が「開苑五年になる史跡御土居もみじ苑は、多くの人に愛されており、宮司を中心に学識経験者による整備に関する委員会も出来ました。現在文化庁などのお指図をもちまして、茶室梅交軒の修繕工事を行っているところです。これからもなお一層、天満宮信仰のお気持ちをお持ち頂き、この講社を中心とした集まりが盛大なることを願っています」と、ご挨拶されました。

御土居の環境整備は天満宮講社の力強いご助力を賜りまして年々進んでおります。千会長が申されました通り、お陰をもちまして今や洛中の紅葉の名所となり、また、夏にはホテルも飛び交うようになりました。ご尽力下さいました千会長を始め講社員の皆さま方に心より感謝申し上げます。今後も神の御心が宿るこの鎮守の杜の環境を守るため、神職一同一層精進していかねばと思っております。

(宮司 橋 重十九)

祭事 暦

(七月十六日、八月三十一日)

神事

七月二十五日 月次祭 夕神饌
宇治、宇治田原、木幡、小倉 京都
城陽、綴喜、佐山、京田辺、八幡
和束、伏見、桃山、醍醐、山城、南
山城の茶所より摘まれた新茶を神前に供え、献茶家の家内安全、繁栄を祈願する
八月 月首祭
四日 例祭
一年間で最も重要な祭典であり、永延元年(九八七)一条天皇が初めて勅祭を斎行された日にあたる。また、農耕の神としての御神徳を景仰し、氏子である西ノ京の農家より夏野菜が奉納される。

二十五日 月次祭 夕神饌
二十八日 奉納図画授賞式
入賞者参列のもと祭典を斎行した後、授賞式を行う。作品は二十日から授賞式当日まで本殿前西回廊に展示する

月釜献茶

七月二十四日 紫芳会 布施 宗青(松向軒)
八月 梅交会 休 会
献茶祭保存会 速水滌源居(明月舎)
十五日 休 会
献茶祭保存会 休 会
松向軒社中 休 会
二十八日 紫芳会 高木 宗和(松向軒)

発行所
北野天満宮
第456号
編集責任者 梶 道嗣
〒602 8386
京都市上京区馬喰町
電話(075)461-0005
一部 50円

にぎわう
夏越天神

夏の健康願う大茅の輪くぐり

本殿では厳肅に御誕生祭

御祭神菅原道真公の御誕生日に当たって六月二十五日、御誕生祭が厳かに斎行された。楼門では恒例の「大茅の輪くぐり」が行われ、夏場の健康を願う参拝者で終日にぎわった。

菅公は、承和十二年（八四五）六月二十五日、文章博士菅原是善公の第三子として京都で誕生され、

延喜三年（九〇三）二月二十五日に大宰府の配所で薨去された。これにちなみ毎月二十五日を天神さまの御縁日としており、六月は「夏越天神」とも呼ばれ、楼門に取り付けた大茅の輪をくぐり無病息災を祈る信仰が定着している。



夏越の大被式斎行

夏越の大被式が六月三十日午後四時から本殿前中庭で斎行された。

写真

今年半年間に身につけた罪や穢れを洗い清め、すがすがしい身体で夏を越すことを願う神事で、崇敬者・参拝者約五百人が参列した。全員で大被詞を奏した後、それぞれが切麻にて邪気を祓った。この後、神職を先頭に参列者が中庭に設けられた背丈ほどの茅の輪を古式どおり三度くぐり、元気に

夏場が過こせように祈った。またこの半年間に納められた人形や車形代も唐櫃に入れられ、神職が担いで茅の輪をくぐった。



御誕生祭は前夜から参籠齋戒していた宮司以下神職の奉仕によって午前九時から本殿で厳肅に斎行された。

写真上

楼門の「大茅の輪くぐり」は午前五時の開門と同時に始まった。大茅の輪は、神職・職員が美山町と京北町から刈り出した茅を青竹に巻き上げたもので、直径は約五センチ。参拝者は次々この大茅の輪をくぐった後、本殿前の中庭に設けられた人の背丈ほどの茅の輪もくぐって夏場の健康と息災を祈っていた。

写真上

水谷さん夫妻が献木

結婚記念と
無事な出産を願う

京都市上京区の水谷啓郎さん・愛子さん夫妻が梅の木（白の八重早咲き・照水梅）を献木され、六月十三日、本殿で奉納奉告祭の後、梅苑内に植樹された。

写真

二月七日に当宮で奉式されており、結婚記念と、妊娠中の愛子さんの無事な出産を願っての献木という。啓郎さんは「奉式の折、由緒ある梅苑に植樹出来る」と聞いて是非献木したいと思っていた。梅の木は百年ぐらいは大丈夫だそうで、大変よい記念になります」と話されていた。



園児ら楽しく七夕祭

七夕の七月七日、伝統の御手洗祭・七夕祭が斎行された。

正月の縁起物「大福梅」として新年の祝膳に使われる梅の実の採取が六月十日から一週間がかりで行われた。

梅とゆかりが深い当宮の境内一

「大福梅」摘み取り

円には約五十種、千五百本の梅の木がある。梅の実の摘み取りは例年梅雨入り前の恒例行事だが、今年はずでに梅雨入りしており、晴れ間をぬっての採取となった。

神職・職員・氏子崇敬者らが青々



と実った梅の実を一つずつ丁寧に摘み取っていた。今年からは始からの寒波の影響も

の後、園児による歌や遊戯などの奉納があり、人形劇「トロッ」の公演を観賞した。

細道
修学旅行中の中学生を中心とした昇殿参拝が今年も五月中旬ごろから約一月間にわたってピークとなった。

写真

四十クラスから五十クラスという日もあり、本殿に昇って祈禱を受ける中学生らで中庭はごった返すにぎわい。

川崎市の中三学校からは雑巾の奉納もあり、全員合格出来るよう日々精進します」との添え書きに「頑張ってます」と

様々な願いを書いた笹飾りが並ぶ中で祭典があり、園児が小さな手を合わせて文芸の上達を祈願した。こ





ほたるのタペでオカリナを奉納

オカリナ奏者 鈴江先子さん

先月十八日開催の「鎮守の森 ほたるのタペ」でオカリナを奉納された。昨年に続いての奉納であり、素朴で澄んだ音色が境内を埋めた参拝者を魅了した。「素晴らしき舞台(国宝の本殿前拝)に立たせて頂き、幸せでした」と、演奏を終えて満足そうに話された。オカリナはイタリア生まれの素朴な土笛で、イタリア語で「小さな鷲鳥」という意味。この土笛に魅せられ演奏活動を



するようになって十一年目。傍ら宇治、京都両市内でオカリナ教室を開くなど活躍されている。オカリナとの最初の出合いは子どもの頃。テレビから流れていた音色に惹かれ、購入しようと母に連れて行ってもらって京都市内の楽器店を探し回った。が見つけた品は土製ではなく、しかも日本語の説明書はついておらず吹けないうまま断念したという。中京区生まれの宇治育ち。京都外国語短期大学を卒業。幼稚園に英語教師として採用され、園児に英語を教えたが、英才教育に疑問を感じ一年で辞めた。幼児からオカルガンに手を染め、長年ピアノを習っており、「私が本当にやりたいことは音楽だと思いました」

「鎮守の森 ほたるのタペ」夜の境内にぎわい



「鎮守の森 ほたるのタペ」が六月十八日午後七時から、本殿前中庭で開催され、多くの参拝者がアカペラやオカリナの



奉納に耳を傾け、境内を飛ぶホタルに歓声をあげた。境内西側の史跡御土居を流れる紙屋川の環境整備が進み、数年前からホタルが飛び交うようになった。この事実を喜び、美しい環境を守っていくことの



大切さを訴えようと昨年から始めた。ホタルを入れた籠の前で神職がお祈りをした後、本殿前拝で立命館大の二サークルがアカペラを披露し、引き続き鈴江先子さんによるオカリナの奉納と、阿武野達世さんによる歌とギターと打楽器の演奏が行われた。

この後、氏子の園児らが籠のホタルを境内に放つと、中庭を埋め

た参拝者から拍手と歓声があがった。写真、上からホタルの放生とアカペラ、オカリナの各奉納

株式会社 奥谷組 京都市南区吉祥院向田東町8番地 電話(075)3113 六五三三

防炎研修に2職員参加 上京自衛消防連絡協議会主催の「防炎研修会」が六月十日、南区の市民防災センターで三十九人当宮からは新人職員ら二人が参加して開かれ、地震・強風・消火・避難・応急手当などの体験や訓練をした。

株式会社 秋江 京都市上京区堀川通今出川上る 電話(075)431 二二五五

翌年、電子オルガンのインストールラクターの資格をとり、自宅でもオカルガン・ピアノの教室を開設。並行して京都市内の音楽事務所に所属し、ホテルや各種イベントでプレイヤーとして演奏活動をするようになった。オカリナと再会したのは十数年前のこと。「シンセサイザーや電子音が全盛で、そうした音に疲れていました。オカリナのあの音を聞き、子どもの頃あこがれたことが思い起こされ、求めている音だと確信しました」

株式会社 材源 京都市上京区五辻通御前通東 電話四六一 六〇二七

オカリナは少し習ったが、後は独学である。楽器に違いはあれ音を奏でることについてはプロである。「オカリナの音域はそんなに広くなく、誰にでもすぐに吹けますが、自分で音を創っていかねばならない楽器なんです」

長五郎餅 北野下 電話四六一 一〇七四

オカリナの愛好者は広がりましたが、オカリナ奏者は少ない。求めに応じ各所で演奏した。三年前の源氏物語千年紀では京都文化博物館で何回もライブを開き、昨秋は十周年記念コンサートも行った。今年九月二十四日には文化パルク城陽でレッスン生と一緒に十年記念の演

株式会社 日本電機商会 京都市山科区大塚森町十三番地三 電話(075)592 四八〇〇

「おびえを受けた後演奏に入りますが、いつも不思議な感覚を覚えます。とくに拝殿の舞台から南の空を見ていると、何百年も前にいるような気がし、演奏している心の安らぎを覚えます」

東和奉産株式会社 京都市南区吉祥院観音堂町七番地 電話(075)691 三〇〇〇

関西アーバン銀行北野支店 北野白梅町 電話四六一 九一四七

天満宮 歴史の一齣

京都大学教授 藤井讓治

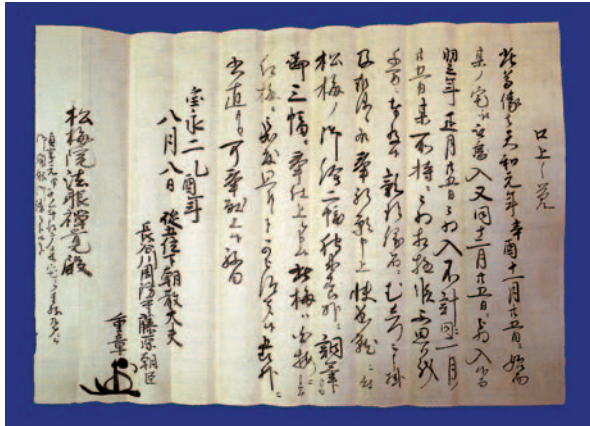
東帯天神像の

寄進者

長谷川重章と

松梅院禅覚

東帯天神像の奉納者である長谷川重章とはいかなる人物であったのだろうか。「口上之覚」の差出には「從五位下朝散大夫 長谷川周防守藤原朝臣 重真花押」と仰々しく書かれて



長谷川重章口上之覚

寛政年間に江戸幕府が編纂した書物、『寛政重修諸家譜』に、この長谷川重章を見いだすことができる。『寛政重修諸家譜』によれば、重章は、三一〇石の上級旗本である。その略歴をたどると、一歳の明暦三年(一六五七)將軍家網に初目見えし、万治元年(一六五八)遺跡を継ぎ、寛文七年(一六六七)小姓組の番士となり、天和三年(一六八三)本所奉行 元禄七年(一六九四)使番、同八年目付、同九年伊勢山田奉行と順調に昇進し、宝永五年(一七〇八)に山田奉行の職を罷免され小普請とされるが享保四年(一七一九)無役の上級旗本の席である寄合とな

り、同一四年致仕、同一六年八五歳で死去した。この天神像を寄進したときには、山田奉行であった。一方、「口上之覚」の宛名「松梅院法眼禅覚殿」の禅覚は、北野神社奉行であるが、この「口上之覚」の宛名の後ろに追筆で、「貞享元年甲子ノ年江戸某宅ニテ貴様九才ニ而御開眼御請被下候、以上」なる記事が見られる。

松梅院禅覚は、北野社諸補任覚帳(目代記録)によれば、父の尚禪が延宝八年(一六八〇)に死去したため、わずかに五歳で跡を継ぎ、貞享元年(一六八四)七月三日に得度したばかりで、「口上之覚」にもあるように、この時わずかに九歳の小児であった。重章の追筆から禅覚が江戸にいたことが分かるが、何故にこの小児が、この年に江戸にいたのだろうか。実は、貞享元年は、將軍代替わりにもなう朱印改め(歴代の將軍が与えた領知を改めて発行)が行われる年で、そのため禅覚は京都から江戸に来ていたのである。そして、その時、探幽筆の東帯天神像が、この禅覚によって江戸の長谷川重章の宅で「開眼」されたのである。その縁で、宝永二年に重章が北野社にこの天神像を寄進したのである。

献 詠 「漁火」

濱崎加奈子選

北前のフェリーの旅を楽しみて漁火揺らぐ夏の涼し夜
福井県 武曾 豊美
なでしこが金子みすゞの墓つつむ眼下に漁火漁師の町よ
大阪府 村島 麗門
瀬戸の海漁火あはく寄す波もしづかにかへし夜は更けゆく
京都市 金居 朝子
東北の汚染し海を案じつ、対岸の島の漁火に祈る
愛知県 鈴木 幸子
ほたるいか奇しき光に漁師らの思ひを知りて胸ぞうずける
京都市 今井 輝子
漁火のほかに照らす川面に魚とる鵜の音風とそよぎて
神戸市 奥田かえで
夏の夜は漁りする火の燃えまきありしにまさるもの思ひ
神戸市 斎藤 興哉
海の色変はらぬままの漁火も人の思ひを連らねて赤し
京都市 若狭 静一
をちこちの海にひろがるいさり火のもどりし春は静かに過ぎる
京都市 塩小路光孚
歌詠みの名よりも赤く水面染め漁火えほし鵜をあやつりぬ
愛知県 仁枝 尚子
震災の北陸の海がなほしきも漁火の火も見えかくれして
岐阜県 山田 清
病院に遠く眺めし漁火をしるせし友ははがき残して
和歌山県 立川 澄子
暮れなつむ沖を見やれば海空を分かち高さに漁火揺るる
福岡市 前田 幸江
波の間に月かたまがふ漁火を恋ひてかなしき水中の若魚
京都市 朝比奈栄子
とぶとぶと漁り火もなき海原をただよぶ舟に鶴の鳴くなり
京都市 上杉 遥
親潮に漁り火絶えし陸奥のぬばたまを割る東雲の空
門真市 白石 雅彦
漁火はいづくはあれど塩釜の浦漕ぎゆくはわけてかなしも
京都市 田口 稔恵



天神さん 昔の風景

当宮保存写真から

昭和三年の春に斎行された千二十五年半萬燈祭にぎわう参道である。当時の二の鳥居(現在の大鳥居の場所)のところである。鳥居の前に車が一台駐車しており、左手に「一円タクシー」の看板が出ている。京都市内ならどこでも一円で走ったという、いわゆる「円タク」である。『京都の歴史(学芸書林)』によれば、昭和二年頃から「円タク」が激増、過当競争で五十銭で走る「半円タク」も続出したとか。左右の幟に「高島屋製」「大丸製」の字が見え、両社の奉納だったことがうかがえる。相当暑い日だったのか、日傘が幾つも見え、アイスクリームの屋台が三軒も出ている。

【評】東北に寄せる歌が多くみられた。「志賀の海人の釣し」ともせる漁火のほかに妹を見むよしもがも(万葉集)のように、「ほ(火)」「ほ(火)」の枕詞として用いられた。